

健康意識における高齢者の年齢別、性別の傾向

- 市民保健医療福祉意識調査より -

新潟医療福祉大学 看護学科 渋谷優子  
杉本 洋

【背景】

新潟市の高齢化は上昇を続けている。平成17年度の65歳以上の高齢者の割合は20.5%であり、県の23.7%に比べて県よりも低く全国平均の20.1%とほぼ同レベルであり増加傾向にある。平均寿命において、平成17年度では平均寿命は男性78.56、女性85.52に対し新潟市は男性79.00、女性が86.60であり男女ともに長い。本研究目的は新潟市の高齢化が進行する中で高齢者の健康意識と日常生活の関係について年齢別、性別の傾向を明らかにし健康生活のセルフケア支援の知見を得る。

【方法】

データは市民保健医療福祉意識調査(平成17年調査)を用いた。

年齢別：60～69歳，70歳以上

性別：男性，女性

分析方法：クロス集計と $\chi^2$ 検定

対象者：新潟市に居住する20歳以上の男女

標本数：4000人

有効回答数：2,614人の内60歳以上の回答者1,051人

【結果】

1. 基本的属性と健康状態

年齢：60～69歳が48.2%，70歳以上が51.8%，性別：男性43.7%，女性54.6%，職業：無職53.6%，職業あり25.2%，主婦などその他20.1%，健康状態：「良い」+「まあ良い」25.9%，「普通」42.8%，「良くない」「あまり良くない」31.0%

2. 年代別比較

(1) 基本的属性

カイ2乗の結果、年代によって男女の比較に有意な違いは見られない。職業は、60歳代37.2%は持っているが、70歳以上は14.4%に減り、無職71.2%となる。カイ2乗検定の結果、有意差が認められ、70歳以上で無職者が有意に多い。性別では70歳以上になると職業をもっている人が少なくなる。無職は60歳代で46.3%に対し、70歳以上74.6%となる。女性では無職は60歳代では26.6%に対し70歳以上では68.7%となっている。

(2) 健康状態

健康状態が「良い」「まあ良い」人は60歳代28.9%，70歳以上23.3%であった。「良くない」「あまり良くない」は60歳代24.5%，70歳以上37.1%、高齢者のほうが主観的健康感がよくない男性の違いは見られないが女性では高齢層が多く見

られ性別に関連が見られた。

(3) 普段の運動

健康のための意識的運動や散歩の実施は5割程度であったが年代的相違は見られない。男女別では男性の意識的運動や散歩には年代差は見られないが女性の場合は年代差が見られ実施は60歳代56.3%，70歳以上45.35%である。定期的・継続的運動や散歩に関して年代による違いは見られない。男女では女性高齢層が低くなり年代差が見られた。

(4) 食習慣

朝食は9割以上が摂取して年代差は見られない。外食の利用は殆ど利用しないが多く、女性は年代差が見られず男性は高齢層が利用しないが有意に多い。野菜・海藻などの揃った料理を採る回数は毎回採っているのは高齢層のほうが多く性別の差はない。普段の食品摂取について、「魚介類」「肉類」「牛乳」「芋類」の4種の食品では年代差が見られ、「魚介類」「肉類」は60歳代が多く「牛乳」「芋類」は70歳代が多い。

(5) 将来の健康不安

将来の健康不安について13項目中、「生活習慣病への不安」「健康を害して働けなくなる不安」「寝たきりにならないか」という不安の3つで年代による違いが見られた。「生活習慣病への不安」では、60歳代61.3%，70歳以上48.7%で60歳代がより不安を抱えている。「寝たきりにならない不安」は60歳代49.1%，70歳以上58.3%で高齢層に有意に多い。男女別では「生活習慣病への不安」は女性では60歳代59.6%に対し70歳以上39.7%で60歳代が高い。「健康を害して働けなくなる不安」は男性の場合では60歳代183%，70歳以上7.9%，60歳代が高い。「不安を感じない、考えたことがない」では女性は年代による差が見られ高齢層が不安を感じたり、考えたことがない人が多い。

【考察】

主観的健康感には年齢だけでなく、性別にも関連することがわかった。普段の運動は意識的のみならず継続的運動の働きかけを女性高齢層に呼びかけが必要であり、将来の健康不安では女性高齢者へのあきらめない意識への支援と関わりを維持していく

表1 基本属性

	年齢		合計	
	60歳代	70歳代以上		
性別 男性	度数	230	229	459
	年齢の%	45.8%	43.1%	44.4%
女性	度数	272	302	574
	年齢の%	54.2%	56.9%	5.6%
合計	度数	502	531	1023
	年齢の%	100.0%	100.0%	100.0%